
若草物語

Reddcherry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若草物語

【Nコード】

N0027G

【作者名】

Reddcherry

【あらすじ】

僕。とある町にある探偵事務所の探偵助手。尊敬する偉大な先生と共に、数々の難題を解決。今日も張り切って出勤。そこに一本の電話が……。

そもそもウチの先生は、すごくデキル人なんだな。どんな事件もタチドコロに解決しちゃうしね。しかも三メートルばかり離れたゴミ箱にもポイと紙くずを投げりゃあスコンと入っちゃうんだから。何でもさ、アメリカの何とかバード大学ってところを全生徒の三十五番以内の成績で卒業したらしいんだな。

すごい。

FBIから誘いを受けたみたいだけどき、結局は日本でね、神社の片隅にあるベンチに腰かけて、足にハエを止まらせながらもハトにエサをやる事が忘れられないってんで断ったらしいんだ。それで日本に帰ってきてから、この探偵事務所をはじめたってワケなんだな。

櫻井探偵事務所。

僕はここで先生の助手をしてる森田六郎。先生からは「ロク」って呼ばれてるんだ。何かカッコいいだろう？「ナナ」だったらまるで女の子だぜ。結構自分でも気に入ってるんだな。「ロク」って呼ばれるのがさ。

僕と先生は幼なじみで、僕からすりゃあ五つ年上の先生はアニキみたいなもんさ。あ、そうそう。小学生の頃にね、二人で百円づつおこづかい持ってさ、近くの駄菓子屋に行ったんだ。僕は適当に欲しい物をカゴに入れるだろ？でも適当っていつてもさ、百円は超えないように考えて選んでたつもりさ。するとね、先生が来てさ、僕のカゴをチェックするんだな。それから人差し指を頭に当ててさ、

目を閉じるんだ。そして一分後に

「ロク！ガムはやめとけ。三円はみ出る。」

って言うんだぜ。たかが一分だよ。その間にまだ子供だった先生は、消費税の計算までしてたんだ。すごいだろう？ちよつとした思い出さ。で、話を戻すけど、僕が高校を卒業してから、就職もしないでアルバイトしながらフラフラと生活してる時があっただ。その日も接骨院のバイトが終わってさ、コンビニでハートチップルとマミー買ってさ、家に向かったんだ。

誰かが後ろからポンと僕の肩をたたくんだな。

後ろ振り返るだろ？

先生が立ってたんだな。

「接骨院のバイト、今日までだろ？一週間前に院長さんに話したもんね。まだ次のバイトは決まってる？とりあえずさ、ウチの事務所を手伝ってくれよ。」

つって、いきなりこうだぜ。しかも何でそんな極秘情報を知ってるんだ？この人・・・。

でも、そんな細かい事は僕は気にしない方なんだな。モチロン、返事はオツケーさ。当然だろ？ちなみに、その後（交渉成立後）、二人で歩きながら帰ってる途中に先生がさ、

「ここ二週間ばかり尾けさしてもらってたよ。」
だとさ・・・。

まあ、そんなワケで、それからの僕は変わったね。毎日毎日先生の手足となつて、テキパキとさ、自分で言うのもなんだけど、そりゃあうまくやってるんだな。僕もいつかは先生のような立派な探偵になつてさ、世のため人のために活躍するヒーローになりたいね。いやあ、言っちゃったよ。分かる？とにかく先生はすごい人なんだよ。言葉じゃ表現できない程にね。分かんないだろうな。ここにきてちよつと三年になる今日、改めて振り返って先生のスゴさを実感したんだな。こんな特別な日だから、今日はちよつと早起きして事務所の掃除をしてるんだ。窓もピカピカ、本棚もスッキリキツチ

り。

よしよし。

ええと、昨日までの浮気調査も片付いたしと、これで完璧だね。今日も気合入れて行こう！先生がいれば怖いモンなんて無いさ！僕と先生のコンビは、明智小五郎と小林少年みたいなものだもの！僕はすこぶる上機嫌で自分のデスクに腰掛けた。今日は一体どんな事件がくるんだろうか？もうワクワクしてくるんだな。

あ！そうだ！

僕は、鉛筆でも二、三本削つところかなと思って自分のデスクの鉛筆立てを見たんだ。線引きと割り箸しか無いじゃん。あれ？と思つてさ、引き出し開けようとしたその時、

ジリリリーン！

と、電話がなつたんだ。

「ハイ！こちら櫻井探偵事務所です。」

と、僕は慣れた口調で電話を取った。

「あ、ロク？おはよう。僕だけどさ。」

「先生！おはようございます！」

「あのさ、どうも盲腸らしいんだ。悪いけどしばらく入院する事になると思うからさ、後頼むよ。簡単な事だけ引き受けてくれりゃあいいかさ。難しそうだったらパスしていいよ。大丈夫。ロクなら可以从るから。一週間くらいで復活できると思うから。よろしくね。」

じゃー！

ガチャ！ツーツーツー……。

頭の中にさ、

受話器を握りっぱなしの僕からさ、

カメラがゆっくりと引いていく映像がさ、

浮かんだんだな……。ホラ、ドラマとかでよくあるでしょ？

静まり返る黒と白のツートンの壁に囲まれた事務所内。響き渡るヒョロ長い振り子時計のチクタクチクタクつつ音。天井のシーリングファンの淋しげな回転。事務所の前を自転車に乗ったオバチャ

ンが、チリーンチリーンとベルを鳴らしながら通り過ぎて行く。
そして僕は、静かに、ゆっくりと受話器を置いた。

・・・・・・・・・・。

ガーン！

僕一人で！？

どうすんのさ！！？

先生あつての僕だのに！！

何もこんな日に一人にしないでモ！！！！

いろんな思いで頭の中はそりやもう大騒ぎさ。イカンイカン。落ち着け落ち着け。僕は、ミルクコーヒーをズズズと体の中に流し込んだ。

フウウウウ・・・・・・・・・・。

すると、アラ！不思議！少し落ち着いてきたんだな。まあ、簡単な事だけでいってワケだし・・・・。でもさ、簡単な事ってどんな事？

・・・・・・・・。

一週間か・・・・。長いな・・・・。

あ！そうか！その間に仕事の依頼が無ければいいんだよ。はは！
そうか！ははは！

は、ははは！そうかそうか！

ははははは！そうかあゝ！

僕は、キャスター付きのイスに座ったまま事務所の中を笑いながらグルグルと回ったんだな。

ははは！そうか！そう・・・・、

イスを止める。

イスから立ち上がる。

ネクタイを締め直す。

右手でコブシをググツと握る。

イカン！

こんな考えしてちゃイカンよ！僕はポカポカポカつと自分の頭を

叩いた。

・・・三年・・・。

ここで働いて三年！僕でも一人でデキル仕事を先生に見せてやるんだ！その為の試練でありチャンスなんだよ！今日から一週間は！僕はイスに座り直し、コロコロと自分のデスクに戻った。そして、再びミルクコーヒーをズズズと体の中に流し込んだのさ。

フウウウウ・・・。

と、コレも再び一息。

よし！やろうぜ！やってやりませ！先生が盲腸って、ちょっと面白いけどさ、今日から一週間は僕に任せてよ！先生！僕は先生のデスクを見つめ、ソコに先生の姿を映し、コクツとうなづいた。やってやりますよって事なんだな。そして、電話が鳴るのが先か！依頼人が来るのが先か！僕は待ったね。

そして、またしても静まり返る事務所。

チクタクチクタクと時計の音だけが聞こえる。しかしさ、さつきまでワクワクしながら待ってた電話がね、恐怖の産物に見えるんだな。分かる？「恐」というパパと「怖」というママから生まれた子供だぜ。この電話は。

チクタクチクタク。

・・・。

チクタクチクタク。

・・・。

ガバツ！僕は立ち上がった！

「花に水やってこよつと。」

僕は象さんのジョーロに水を入れ、事務所の外にある花壇に向かった。

「あゝ。いい天気だなあ。」

最近、雲ひとつ無い空よりも、少しばかりある空の方が好きだな。よって今日は非常に良い天気。暑い夏も終わって、過ぎしやすくなった秋の初め。いい季節だね。こんないい時期に盲腸なんてさ、

やっぱり面白いや。ププツと吹き出しながら何気に向かいの通りを見ると、入居待ちだったテナントが決まったみたい。ええと、何だる？ってな事思いながら、僕は内ポケットからミニ双眼鏡を取り出して覗いた。

花屋か！よし！

花屋つてさ、カワイイ女の子が働いてるイメージが僕にはあるんだな。そしたら事務所の花は全部その店で買うようにしてさ、だんだんとそのカワイイ子と友達になってさ、いつしか恋人になったりしてさ！いやあ、いいねえ！

象さんのジョーロから水がダラダラ流れ、自分の靴を濡らしながらも僕はニヤリと秋の心地よい空の下、つつ立ってたんだな。そして、事務所のドアを開け、中に戻った瞬間、

ジリリリリン！

と、恐怖の産物が遂に口を開いたんだ。

ジリリリリン！

いやあ、ハートにヒビがはいたね。

ジリリリリン！

象さんのジョーロ、床に落としちゃったつつの。

ジリリリリン！

オソルオソル近づいて行く。

ジリリリリン！

間違い電話、間違い電話！

「間違い電話でお願いします！！」

と、気合を入れつつ受話器を取る！

ガチャ！

「ハ、ハイ！櫻井探偵事務所ですけれども！！」

声が裏返っちゃったぜ。過ごしやすい季節だのに額から汗がツウツと滴り落ちてるしさ。

さあ、お前はどっちだ！？

間違い電話野郎か！！！？

それとも!!!?

電話の人はこう言ったね。

「あの〜。仕事を依頼したいんですけど。」

2

殺人事件ってさあ、普通は警察に言うものだろう？何でウチに言ってくるの？まあ、警察に言えない事情ってのがあらしいんだけどね。それにしても。それにしてもだよ。数ある探偵事務所の中でウチを選ぶとはね。そう！先生のいないこんな時に限ってね！と、鏡に向かって話していた僕は、さらに続けたんだな。だってさ、さっきの電話の人、

「このままだと、あさつての夜に必ず殺人事件が起こります。それを阻止してほしいんです。」

っていう内容の事を言うんだぜ。本当はこんな抽象的じゃなくて、もう少し細かい事言ってたけどね、もう僕は焦っててさ、この二言しか覚えてないんだな。まあ、二、三時間したら詳しく説明する為にココに来るつつうからその時に聞けばいいやって思ってたしね。

ああ！そうなんだ！今から来るんだよ！二、三時間って言うけどさ、こういう場合はやっぱり二時間で来るっていうつもりで行動するのが常識だろう？ええと、まず事務所は今朝ピカピカにしたから良しと。表の花壇の水やりも良しと。僕は事務所の中をグルグル

と腕組みしながら歩き回ったんだ。何かおかしいなあ。何か足りないんだよ。何か足りない……。ナニガタリナイ！

あ！

僕は足をピタッと止めた。

そうだ！僕の落ち着きが足りない！

それからね、深呼吸をしたり、ミルクコーヒーを飲んだり、顔をピシヤピシヤッと叩いてみたり、逆立ちして一人シリトリやってみたり、僕はとにかくいろいろやったんだな。

で、ようやく落ち着いてきてさ、ふと時計を見たんだ。いやあ、カ
ップラーメンの三分の方が長いね。こういう場合の二時間よりはさ。
もう約束の時間だよ。フフフ……。でもね、そう言ってもさ、二
時間でこっちは計算してるからさ、最低あと三十分は来ないでしょ
？って思ってたらさ、

コンコン！

と、ドアをノックする音がきたのさ。マイったね、こりゃ。ピッ
タリ二時間だぜ。電話で二、三時間って言ってたじゃん。どう計算
して二、三の「三」が出てきたんだよ！僕はプリプリしながらもネ
クタイをキュツと締め直してさ、ドアを開けたんだな。

と、どうだい。そこにはね、クルクルつと、いやボサボサつと……。
まあクルクルボサボサの髪型でさ、目なんか五百円玉くらいデカ
いんだな。その上、ツンとした鼻に口尻がキュツと上がった極上な
マシユマロリップ。顔は僕の手のひらで隠れちゃうくらいさ。服装
はさ、白いワンピースに赤いブーツですぜ。ホラ！アノ！昔の映画
の！ホラホラ！何て言ったっけ？有名なヤツ！とにかくそれに出て
た女優を連想させるカワイイ感じのヤツを着てるんだぜ！

ズバリ！僕のタイプ！

そう、その女の人が立ってたんだ。ドアを開けた所にさ。で、

「あの、さつき電話した者ですけど。」

と、こうぞ。

「あ、ハイ！浅井ルリ子さんですね？お待ちしておりました。私、
森田六郎と申します。」

さあ、どうぞこちらへ。」

僕は振り向きざまに小さくガッツポーズしたんだな。もちろん彼
女に見えないようにね。

僕はまず、彼女をソファアに座らせて、ミルクコーヒーでもどうで
すか？って聞いたのさ。気が利いてるだろう？そしたら彼女さ、

「シイタケ茶かコンブ茶あります？」

ときたぜ。いやあ……。

ズバリ！僕のタイプ！センスいい！

ははは。どっちも無いつつうの。シイタケもコンブもさ。僕は走ったね。お茶屋まで。五百メートル。フォームなんか陸上選手並だったな。

五分ばかしで戻ってきてさ、よく見ると入り口のドア開いてるじやん。

「あ、ひよつとして、僕がいない間に誰か来ました？」

って、ぼくはルリ子ちゃんに聞いたんだ。そしたら彼女、

「いえ、誰も来ませんよ。六郎さんがドアを開けっ放しで出て行ったきり……。」

ほお……。そうだったのね。でもさ、ここで大変嬉しいことが二点ある。

一、ルリ子ちゃんが軽くウケていた点

二、ルリ子ちゃんが、僕の事を六郎さんと名前で呼んでくれた点
いやあ……。いいわ。いい！うん！とてもいい感じ！ジエームス・ブラウンなら間違いなくここで

「ア フィールグー！」

なんつって言うんじゃない？まあ、そんなこんなでさ、シイタケ茶を入れてさ、彼女の前にススつと置いてさ、小生もその向かいに座ったってワケ。いよいよ本題に入るためにね。……。でもね。ルリ子ちゃん、いちいち仕草がカワイイんだな。シイタケ茶を飲むときにさ、湯呑みを掴んだんだよ、ルリ子ちゃんが。たぶん熱かったんでしょな。

「アツッ！」

って言うって慌てて自分の耳たぶ触るんだよね。耳たぶをさあ。このリアクションする人ってそうそういないぜ。しかも何故か両手で両耳なんス！それで、そのまま笑うんだな。笑い方なんかゴールデーン・ホーンの若い頃の！アレよアレ！肩をすばめて顔をクシャッとさせるヤツ！アレだぜ。アノ顔で笑うんだぜ。で、ちよつとコボしたってんで出したハンカチにさ、クマさんの刺繍がはいってんだ

よ。もうマイツちゃうね。コンボだよコンボ！カワイイ仕草のコンボ！略すとカワコンさ。いやはや神がかつてるよね。で、何だったっけ？あ、そうそう。これから本題に入りますぜ。

3

「何故こうなったかを話す前に、私の住んでいる所の事を説明しておきますね。」

って、ルリ子ちゃんは、シイタケ茶をズズつとやり、コトつと湯呑みを置いた後、話始めたんだ。

櫻井探偵事務所があるこの町から、南北に延びる国道を南に向かう。僕がバイトしてた接骨院を通り過ぎ、カドに豆腐屋がある信号機を右に曲がる。しばらく道なりに真つ直ぐ進んで行くとY字にぶつかる。右に行くと怖いお化け屋敷で有名な「ストロベリーフィールズ」っていう遊園地。左に行くと港に辿り着くんだ。その港からでてる連絡船に乗って

波に揺られる事三十分。「鈴木島」って島に到着するワケ。その鈴木島には五つ程村があつて、ルリ子ちゃんは、その中の「山田村」に住んでるんだってさ。で、なんとルリ子ちゃん、山田村の村長の娘なんだって。つまりセレブだよな。いやあ、どうりでキラキラして見えたワケだ。納得！納得！セレブ！セレブ！はははは！……って、そんなセレブ様にサンマなんて出しているのか？まあいいだろ？ルリ子ちゃんが食いたいって言ったんだし。なんつって僕はサンマを焼きながら自問自答したのさ。え？一体この状況は何とした事か？ははは。そうだろう、そうだろうよ。それはこうさ。ルリ子ちゃんが村長の娘だつとトコまで話が進んだ時、僕さ、ウカツにもエア抜きしたくなつてさ……。え？エア抜きって何かって？マイガー！知らない？屁だよ！屁！屁をしなくなつたんだよ！それさ、

「あ！話の途中でゴメン。茶菓子でも出すね。」

なんつってさ、事務所の奥にある小さいキッチンに、茶菓子用意しに行くフリしてエア抜きしに行っただってワケ。左手で茶碗とかガチャガチャ音立てながらさ、右手でウチワ、尻の付近。パタパタ仰いだんだな。仰ぎながらキッチンの影からソツと事務所覗くと、手塚治虫の「ブツダ」を黙々と読んでるルリ子ちゃんが見える。席を立つ前に渡しといたのさ。ナイスだろう？ ジェントルメンだろう？ そうしてる間にキッチン内の空気も安定してきてさ、ウチワしまったよ。さて、ココからが問題。だつてさ、茶菓子なんて無いんだもん！ しかも僕、その事分かってたし。でもさ、どうしてもエア抜きしなかったんでツイツイ……。まあ、そんな事で悩んでてもしょうがないし、とりあえず冷蔵庫開けてみたらさ、あつたワケよ。サンマが。で、冗談でさ、ハハ、冗談で、だよ。

「ゴメン。茶菓子無いみたい。サンマならあるけどね。サンマ食べるかい？」

ってルリ子ちゃんに聞いてみたの。もちろん断るかと思つたし、その時はコンビニまで走るつもりだったさ。そしたらさ、

「サンマ！？ 食べる！ 食べる！ ハラワタ有でお願いします！」

ブツダの本をポーンとさ、ポーンと二メートルばかり飛ばしてさ、ただでさえデカイ目をさらにデカくして、口はアラレちゃんの笑顔並に広げて、手はアレよ！ アレ！ キリスト教徒が祈つてる時の手。

両手をこう、ガッチリとさ、指の間に指入れて……。分かるだろう？ そんなもつてよ、そんなもつてさ、飛び上がった喜んでんだな。

いい！ やっぱいいわ！

で、焼いてるワケね、秋の味覚サンマを。

焼く前にサンマの水分をキッチンペーパーでしっかり取つてさ、酒を入れたトレイにサンマ入れて、そこに塩。イスの上から振つたねさながら粉雪が舞い落ちるように。しばらくおいてから、いよいよ「焼き」だよ。表面をカリつとさせる為に先ず、裏側を五分。ひっくり返して四分。頑固オヤジも唸らせる手際の良さで残すところ、

ハイ！ 三秒前！

二！

一！

カーツト！

さてさて、このサンマちゃんをゆつくりと皿にのせ・・・おつとつと！半分ちぎれる！ははは。大丈夫大丈夫。ヨイシヨツとね、コレ。ハイ、皿にのせました。で、何だっけ？ああ、大根おろしのせるっしょ？やあぁ！いいねえ。

やりました！森田六郎作、サンマの塩焼きの完成ツス！さぁ運びましよ。あ、待って。

その前に顔チエツク。ルリ子ちゃんに一番いい顔で届けたいからね。僕は冷蔵庫の横の柱に掛かっている鏡を覗きこんだ。

.....

いい顔してらあ。キリツとした眉毛、澄んだ目、愛嬌のある鼻と口。アイヤー！アゴにサンマのパーツが張り付いてらあ。きつと焼いてる時に付いたんだね。良かったぜ、顔チエツクしてさ。しっかし、いくらサンマの塩焼きがプロ並に焼けたっつたつてもさ、ははは、アゴにパーツ付けてたらカッコつかんよね。はははは。すると.....

「何してんスか？」

ゲゲエツ！ル、ルリ子ちゃんじゃん。いたの？

「ブツダ四巻欲しいんですけど.....あの、鏡に向かって何してんですか？」

「あ、どうも。へへへ.....コレ？この事？あ、コレはね、なんつうかな、ホラ、例えば夢の中で妖精に出会ったとするじゃん。場所は・・・そうだな.....お花畑！あ、いやいや！ははは。ごめん。田んぼの真ん中にしよっか。そこでさ、まず老人がいてさ・・・あ！そうだ！サンマ！サンマが焼けたんだっけ！」

「え！？出来た？サンマの塩焼き！やったあ！」
.....

ウマイ.....僕.....カワすのうまいよ。ルリ子ちゃん戻って

つたし。全然気付かず、しかも喜びながらさ。それで、僕は無事、ルリ子ちゃんにサンマの塩焼きを届けたんだな。

「みんなハラワタは苦いって言うけどね、私は甘く感じるんですよ。」

ルリ子ちゃんは、秋の味覚サンマの塩焼き（森田六郎流）を幸せそうにほおばりながら言うのである。二人でサンマの塩焼きをツツきながら、この居酒屋つばい雰囲気の中で、僕はルリ子ちゃんが（山田村）の村長の一人娘である事の続きから聞くことにしたんだなで、結局まとめるところになったのさ。

ルリ子ちゃんの父親、つまり山田村の村長である浅井健三郎氏は困っていた。何故なら、（跡取り）が欲しいからである。あ、今、何だよ！そんな事かよ。どんな事かと思っただらさあ、バツカじゃーん。って思っただ人もいると思うよ。実際僕も思っただしね。でも、それがさ、どうも複雑な話なんだな。山田村の村長つてのは、浅井家で代々受け継がれてきて、今年で十一代目だつてさ。スゲーよね。で、浅井家は子供は必ず一人。一人しか作らないんだとさ。で、今まで十一代続いた浅井家は、どういう訳か、男の子しか生まれなかつたんだな。で、問題なく、その息子に村長という役職を引き継がせてきたつてワケね。でも、現村長の浅井健三郎氏も、そのお父さんも、そのまたお父さんも、みんな考えてた事は一つ。そう！

女の子が生まれたらどうしましょう！
である。

しかし、十代目山田村村長（浅井三平氏）までは、うまい具合に男の子が生まれてきたんだな。ま、女が生まれたらさ、そんな時考えよつと。なんつう考えで今までできてたらしいね。もちろん、浅井健三郎氏もそうね。そりゃそうさ。そうなつちやうよ。十一回子供が生まれてさ、全部男の子だよ。心の片隅には（もしかして……）つつう事考えてるけども、ま、最悪そんな時考えりゃいいじゃんつてな考えになるさ。僕だつてそう思うもん。

で、結局、生まれちゃつたワケね……。女の子が。ルリ子ちゃ

んがさ。いやあ、困った！困った！（山田村村長説明書）には、女の子が生まれた場合なんて事は書いてないしさ。村中集めてさ、どうする？どないしましょ？なんつって会議したらしいんだな。でもその会議がさ、みんな久しぶりに集まったってんで、同窓会みたいな感じになっちゃってワイワイ昔話に盛り上がっちゃったらしいんだ。楽しい人達だよ。村の一大事なのにさ。

で、盛り上がりが落ち着いてきた頃、一人の村人が、思いついたように、

「そんなら、養子もらえばいいじゃん」

って言ったんだって。納得！この意見にその場にいた一同は納得したんだとさ。ちなみに僕も納得さ。で、ルリ子ちゃんが二十歳の誕生日を迎えた日から、浅井家の養子、ルリ子ちゃんのダンナ、山田村十二代目村長探しが始まったってワケ。もちろんルリ子ちゃんの知らない所だね。

4

秀才で有名な煙草屋の息子の照井シゲル。お爺さんやお婆さん、子供達、誰にでも優しい、ペットシヨップ手伝いの町田正彦。ロシア人ハーフの二枚目、鈴木モルドフ和夫。明日の天気を六割の確率で当ててしまう、村一番の霊能力者、田原大作。などと、村のナイスガイ達の名前が次々と挙げられたらしいんだな。

が、中でも圧倒的に指名されたのが、石松金太郎、二十七才。学力はソコソコだけど、スポーツに関しては抜群。特に格闘技。村のボクシングジムに通っていて、将来はプロのボクサーになるとかならないとか・・・。とにかく腕っ節は最高で、学生時代はかなり暴れん坊だったらしいよ。そんなんで、村で石松金太郎に逆らうヤツなんて誰もいない。ケンカが強いから？そうそう。ま、それはモチロンだけどさ、なんつったって一番のポイントは顔。今までの実践で作り・・・いや、直された顔。その上ボクシングジムによって更にゴ

ツク鍛えられた顔。そんな顔を見て、村の人達は尊敬の意味も込めて、彼の事をこう呼んだんだな。

ゴツツイ石松。

この顔と遭遇したら、どんな猛者であろうとスミマセンスミマセンなんつって道を譲るんだってさ。しかも戦いになつたところでゴツツイ石松は無敵。で、極めつけは、親が金持ち。いやあ、ははは、すごいねこりゃ。んでもって、決まりでしょ？ね？みんな。つつう感じで決まっちゃったんだな。彼に。で、その翌日に浅井健三郎氏から、ルリ子、大事な話があるんだが……。って、跡取り候補決定の件が伝えられたってワケよ。いいじゃんいいじゃん。彼、ケンカも強いしさ、家は金持ちだしさ、いいじゃん！ゴツツイ石松？は。良かったじゃん！ってココまで話を聞いた時点で僕はルリ子ちゃんに言っただな。するとルリ子ちゃん、悲しい顔してさ、

「違うんです。良くないですよ。良くないのよ！親達は知らないけど、彼……アノ野郎は最低なんです！」
って言うんだな。

ふんふん。ふん！え？うそ！あ、そう！へええ。え！？げっ！うん、うん。ほえ。って、僕はルリ子ちゃんから、彼女が悲しさと怒りを混ぜたような気持ちでそう言った訳を聞いて驚いたんだな。

石松金太郎。ゴツツイ石松。確かに最低な男だ。なんつうかな……。ジメってる。性格がジメジメしてる。気に入らない事や人間に遭遇すると、ウラでコソコソとするタイプらしいんだな。ケンカが強いんだから正面から堂々とぶつかっていけばいいんだらうけど、好きなんだね、きつと……。ジメジメ攻撃が。だって、小学生が学級委員になりたいが為に、ライバルの子の家に調理前の豚ホルモン五百グラムをさ、毎週金曜日に差出人不明のまま送り付けるかい？学級委員決定までの間一ヶ月だけ。中学生が、好きな子がバレンタインに自分にチョコをくれなかつたつって、下駄箱の中のその子の靴の中に生ガキつめるかい？知らずに足入れたらグチュツてなるんだぜ。高校生が、授業態度が悪いって自分に注意してきた先生

にムカついて、その先生の車のタイヤを、四本ともパンクさせ、その上事前にこの日の為に自分で作ってきたトリガラスープ（大なべ一杯）を車の中にぶちまけるかい？これ、ニオイとれないよ。ま、ここら辺は大まかなヤツ、いわば氷山の一角ってヤツで、まだまだたくさんあるらしいけど、一つ一つ挙げるとキリがないんだって。故に被害者総数はなんと百人以上だつてさ。被害者達はみんな、犯人の見当はついてるんだけど、訴えたところで、その後の仕返しが怖いってんで、結局みんな泣寝入りしちゃうらしいんだな。そりゃそうだよな。彼は精神的暴力も、肉体的暴力も得意なんだから。それがゴツツイ石松なんだからさ。

「いつやー、さつきはゴメン。知らなかったとはいえノンキにあんな事言っちゃつて。しつかし、とんでもないのを押し付けられたもんだね。」

僕は、煙草に火を付けながらルリ子ちゃんに言った。

「ええ、はい。たまらないツス。」

ルリ子ちゃん、こう言いつつシイタケ茶を一口。そして続けて、「私、断つたんです。縁談。だつて……。だつて、そうでしょう？分かりますよね？ゴツツイ石松ですよ？もし六郎さんが私の立場だつたらそうするでしょ？あんなヤツの妻なんて、あんなのと一生過ごすなんて……。絶対の絶対イヤ！」

ドンッ！！

ルリ子ちゃんは興奮のあまり、握った手を力いっぱいテーブルの上に振り下ろした。

古かつたんだねえ……。いやいや。あ！そうそう！そういや痛んでたわ。え？ああ、これこれ。テーブル。だつてか弱い女の子がさ、ちよつとドツいたくらいで普通割れるかい？はは。そう、割れちゃつたんだな。今。

「ご、ごめんなさい！いやだ！私つたらホント……。」

「いいいいいよ！気にしないで。もともとガタがきてたヤツだったからさ。これでやつと新しいの買えるつてもんだよ。」

テーブルチェンジ。シイタケ茶も用意。あ、僕もついでに飲んでみるかな。ウマイの？これ？ズズ。。。マズイ。やめるかな。そしてルリ子ちゃんの話は再開。

「ゴツツイ石松のジメジメ攻撃は、やっぱりホルモン五百グラムから始まりました。しかも、キツパリと縁談を断った日の翌日からね。」

ルリ子ちゃんは、頭に手をやり、うつむき、（私はマイっているのよ）という仕草をした。この後、ルリ子ちゃんの苦労話が続くんだけど、僕が要点を再びまとめました。

ホルモンから始まったジメジメ攻撃は、タラの白子八百グラム、蟹の甲羅だけのやつ三匹分などと続き、時々、作戦のつもりかケーキ詰め合わせや、愛媛みかんダンボール一箱など、まともなモノも送りつけられてきた。

犯人が分かっているこのジメジメ攻撃に、ルリ子ちゃんは耐え続けたが、確実に精神はジワジワと崩されていった。彼女としては、このまま無視してれば、いつかはヤツも諦めるだろうと思ってたらしいんだな。が、あまりにシツコイ、ほんつとにシツコイ攻撃に、自分が先に殲滅されてしまうと感じたルリ子ちゃんは、幼なじみでよく一緒に散歩したり、神社でキャッチボールをしたり、焼き肉を食べたり、時には悩み事を相談したりする、中島国広という同い年の男の子に助けを求めた。今までのいきさつを中島に伝えると、彼はとても素晴らしい助けの言葉をくれたそうだ。でも感動しすぎて言葉の内容は覚えてないんだってさ。これにより、殲滅寸前までいったルリ子ちゃんの精神は、見事に修復され、元通りになった事は確かであった。中島と別れた後、ルリ子ちゃんは、この幼なじみの存在をとて嬉しく思った。その夜は、久々に出た食欲から、天ぷらうどん三人前を平らげたそうだ。

しかし、やられた。中島が襲撃されたのだ。村一番のコエダメに落とされたそうだ。この知らせを受け、ビックリしたルリ子ちゃん、中島の家に行こうとしたが、考えてみると、中島が襲われたの

は、自分と仲良くしているのをヤツが知ったからで、このまま中島の家に行くともた彼が襲われる。ルリ子ちゃんは、悲悔しい気持ちで家に引き返した。すると、自分宛に一通の手紙が届いていた。

「コレです、コレ。」

と言つて、ルリ子ちゃんはバッグから手紙を出し、僕に差し出した。

赤い封筒。僕は中から手紙を取り出し、読んだんだな。

（十五日の夜までに考え直せ。さもないと、次の犠牲者を出す事になる。今度は命の保障は無いぜ。）

ワープロで書いてくるところが、無機質なというか、感情の無い、冷血な感じを与えてくれるね。

「これって、やっぱりゴツツイ石松からだよね？十五日の夜・・・

。今日が十三日だから・・・。あ、そうか！これであさつての夜に殺人事件が起こるって・・・。」

「そうなんです。」

「でもさ、こうは書いてあつても流石に殺人つて事無いんじゃないかな？これまでのやり口からするとさ。」

「いいえ。ヤツ、暴走寸前なんです。ヤツは過去に二度暴走した事があるんですけど、その被害者二人とも、危うく殺されるところだったんですから。十人がかりでヤツを取り押さえて、ロープでグルグル巻いて、寝袋につめて、一晩放置したら暴走モードみたいなのが解けたらしく、何も覚えて無い状態になつて・・・つて、とにかく暴走してしまうと最悪なんです。しかも今回は村長の座もかかっているし。村の知り合いに相談しようにも、幼なじみの二の舞になつてしまうだけだし。身内の事なんで警察にも言いにくくて・・・。それで、探偵の方なら何かいい方法を見つけてくれるだろうつて思つたんです。こういうの、マンガで読んだ事あるし。」

ここでルリ子ちゃん、ゴールデイ笑い。

「そ、そうか・・・。フンフン・・・。あ、ちなみに探偵なんか他に

あるのに何でウチを選んでくれたの？」

「テキストです。テキスト。タウンページをパラパラやって、一番最初に目に付いたんで。」

ルリ子ちゃんは、またもやシイタケ茶をズズツとやった。

「あ、まだあるよ。シイタケ茶。」

なんつって僕は立ち上がった。

その時、

ガチャ！

入り口のドアが開いた。僕はドアに目をやって、ルリ子ちゃんは振り返ったんだな。

「え？ヒロちゃん！」

ルリ子ちゃんが立ち上がって叫んだ。

「アレ？知り合い？」

「さつき話しにでてきた幼なじみの中島国広君です。」

ヒロちゃんと呼ばれた男は、開口一番こう言った。

「み、水下さい！」

5

中島国広は激怒した。大好きなルリちゃんが結婚？しかも相手はあのゴツツイ石松だつて？他の男ならまだしも、よりによってあんなヤツとは……。その夜、彼は枕をティアドロップスで濡らした。そして次の日、ルリ子が縁談を断つたという噂を耳にした。中島は大いに喜んだ。ご無沙汰してた先祖の墓参りに行った。枕も干した。そして次の日、ルリ子がゴツツイ石松からのジメジメ攻撃を受けているという噂を耳にした。中島は再び激怒した。

「イカン！イカンよ！国広！このままでは！守らなくちゃ！ルリちゃんを！」

勢いだった中島は、上着をオリヤーと脱ぎ捨て、上半身裸で鏡の前に立った。そして、へこんだ。

「僕には、僕にはヤツと対決する勇氣も腕力も無い……。でも、このままじゃいけないんだよな。何とかしなくちゃ。で、でもなあ……。」

中島は自分の部屋でウロウロしながら考えた。何かいい方法はないかと。ウロウロしてるうち、本棚の角にガツンと足の小指だけをぶつけた。イデッ！つって屈むと、今度は頭を本棚にガツンとぶつけた。本がバラバラと中島の上に落ちてきた。もはや中島、痛さと情けなさで泣きそうである。っていうか、ちよつと泣いた。落ちてきた本の中に、（シルバーアクセサリー）なんつう洒落た本があるのが目にはいった。ルリ子にシルバーアクセサリーを誕生日プレゼントとしてプレゼントしようとして、勉強の為に買った本であった。「うう、ルリちゃん……。結局あげてないや。くそう……。シルバーか……。石のヤツでもいいなあ……。ダイヤ？はは。無理無理……。ん？ダイヤ！？ダイヤモンドを磨くにはダイヤモンドあ！毒をもって毒を制す！ハムラビ法典！ジメジメにはジメジメを！おお！」

中島国広。覚醒。

「そうかあ！ジメジメだよ！これで僕はルリちゃんを守るんだ！ジメジメ防御で！よおおしやあああ！」

中島は、ラオウが天に還るが如く、右手を高々と掲げた！

「くにひろー。ご飯できたよー！」

「ほーい！」

中島は、スタスタと階下へ降りていった。

次の日中島は、緊張の面持ちで、五軒向ここのルリ子の家に向かった。

ジメジメ防御、作戦開始。

周囲に怪しまれないように郵便受けを見る。アルアル！噂どおりだよ！そこには差出人不明の怪しげな小包が入っていた。デッデッ、デッデとミッシェンインポッシブルのテーマを頭の中に流し、ササッと小包を抱え込み、自分の家に帰った。開けてビツクリ玉手箱っ

てな感じで、浦島太郎並みに中島はその小包の中身にウゲゲエツと驚愕した。小包の箱を破ると、中には卑猥な本の切り抜きでクチャクチャに包まれたモノがあった。その包みを開けてみると、そこにはブドウの皮と種。つまりブドウの食いカスがタンマリとあった。重さにして一キロ。何てヤツだ。これじゃあるリちゃんがいッちゃうぜ。中島は、ビニール手袋を装着し、ブドウの食いカスの包まれた卑猥な本の切り抜きを箱から取り出し、ゴミ袋にいれ、月曜日の燃えるゴミの日に出した。そして、代わりに箱の中に、イチゴシヨートやチーズケーキなどを詰めて、怪しまれないように周囲に気を配りつつ、再びルリ子の家の郵便受けに戻した。中島は満足した。いいんじゃない？コレいいんじゃない？なんつって喜んだ。その後も、隙をみてはルリ子の家に届いている差出人不明の怪しげな小包を、ササツと自宅に持ち帰り、不吉な中身を排除し、お米券やら愛媛みかんやら明るいモノにすり替え、ルリ子の家に戻した。こうして、ジメジメ防御を開始して二週間ばかり過ぎた頃、中島の家にルリ子から電話があった。ルリ子の声は沈んでいて、相談があるので会って話したいという事だった。

「ルリちゃん。かなりやられてるな。ジメジメ防御が効いてないのか？ま、とにかく会おう！」

って中島は、待ち合わせ場所の、ルリ子とよく行く居酒屋に向かった。そこで中島は、ルリ子から今までのいきさつとその苦勞を、ワーツと押し寄せる波のように告げられた。自分のジメジメ防御の事は伏せつつ、ルリ子を元気付けようと、中島はあーだこーだ言った。そのうち、自分で喋っている言葉に我ながら感心し始めた。ルリ子も同じように感心しているように見えたので、調子に乗った彼は、そのペースのまま続けたのだった。何を喋ったかって？ははは。覚えて無いっつうの。自分に酔っちゃって。興奮しちゃって感動しちゃってさ。でも、ルリちゃんを元気にさせた事は間違いないと思っうね。ルリ子と別れた帰り道、中島はこう自問自答した。よし、明日からもジメジメ防御がんばるぜ！って飛び上がったその時、目の

前に黒い大きな影が現れた。月の光が少しづつその正体を明かしていく。ゲゲツ！ゴ、ゴ、ゴツツイ石松！そう、中島の前に現れたのは、ヤツだった。

「お前か、中島国広つてのはよ。」

返事をするまでもなく、目の前に火花が飛び散り、気付くと村一番のコエダメの中にいた。どうやってコエダメから這い出し、家に帰ったかは覚えてないが、とにかく帰った。次の日布団の中で目覚め、こう思った。

怖い……。ゴツツイ石松、やっぱり怖いよ。

布団から出たくなかった。次の日、その次の日も彼は元気が出なかった。そのまた次の日の晩ご飯はカレーだった。それを見た彼は、コエダメが思い出されてゲンナリした。しかし、何とか二杯平らげ自分の部屋に戻った。そして、しばらくボーツとしていた。すると、
いいのかい？

という声が、かすかに聞こえたような気がした。回りを見わたすが誰もいない。気のせいかと、再びボーツとしかけたその時、
いいのかい？そんなんでさ。

と、今度は確かに聞こえた。慌てて声のした方を見た。彼がいた。中島は彼を知っていた。そう、彼は天使のクニちゃん。中島がピンチに陥った時に、たまに現れる。

「いやあ、クニちゃん。久しぶり！」

ホントだね。君が財布を失くした時以来だね。

「そうそう！そんな時もあったっけ。あの時はありがとう。結局財布はでてこなかったけどさ、クニちゃんに励まされたおかげで元気だよ。ま、中身も千二百円しか入ってなかったしね。」

いやいや。いってばさ。それより、いいのかい？

「え？」

え？じゃないよ。ルリちゃんの事さ。君が助けてやらなくちゃ、彼女、潰されちゃうよ。

「あ、ああ。そうなんだ。分かってるよ。」

いいや、分かってない！今の君はまるで……。アレ？まるで何て言おうとしたんだっけ……。

「ははは。」

ははは。ま、とにかく、いくらゴツツイ石松が怖いっつたってこのままじゃいけないよ。ムーブメンツを起こさなきゃあかなくて。いかい？今、ルリちゃんが必要としているのは、結果じゃなくて、アクションだよ。そりゃ、結果がうまく行けば最高だけどさ、今やるべき事は、進行形を彼女に与えるんだよ。分かる？守ったっつう事より、守っているっつう事が大事って事さ。

「あ、そうか……。分かるよ……。僕分かる！分かったよクニちゃん！」

分かってくれたかい？君は男だ。ルリちゃんは女。動け！ムーブメンツを起こせ！ラーラーラ、ラーラーラー！」

「あ！ヘイジュード？」

ははは！ラーラーラー！ヘーイクニヒーロー。

歌いなが天使のクニちゃんは消えていった。

「ありがとう。ありがとう！クニちゃん！僕、やるよ！やるったらやるよ！男だもの！

オトコダモノーツ！」

中島は、布団から飛び出した。

再び、中島国広。覚醒。

「ジメジメ攻撃？はは。もうやらないよ。正々堂々と正面からいってやるぜ。僕が守っているっつうのをルリちゃんに見てもらって、安心させてやるんだ。よし！僕のこの心意気、男らしく守りまっすっついう誓いを宣言しに、行こう！ルリちゃんの家に行こう！」

そして次の日の朝、中島はルリ子の家に意気揚々と向かった。

「アレ？」

ルリ子の家のすぐそばまでやって来た中島は、玄関から出て行くルリ子を発見した。

「よ、よし！今だ！はは。丁度よかったよ……。ま、待て

よ。どこ行くんだろ？こんな朝から。うん．．．よし！ここはあえて声をかけずに尾行しよう！」

中島、結局ジメジメ防御。

「フンフン、船に乗って．．．。ハイ、降りました。え？タクシー！？ヤバッ！慌ててタクシーを捕まえる中島。」

「運転手さん。前のタクシーについてってよ。」

「ハイ！降りてと．．．。ここから歩きか。へえ、結構歩くね．．．。あ！入った！建物に入りました！って、ここって、探偵事務所！？な、なして！？うん。どうしよ。どうしよ。入っちゃう？いやいや！入っちゃおつか？いやいや！」

中島、この場所で三時間躊躇する。

「よ、よし！行こう！」

こんなワケで、彼は桜井探偵事務所のドアを開けたのだった。

6

六郎、ルリ子、中島の役者三人が揃った桜井探偵事務所。場所は再びココ。

「つまり中島君は、ルリ子さんが心配で追ってきたと、ゆつこと？」

顔立ちは良い方だが、全体的に華奢で、前髪が目の付近まで被さってるわ、なで肩だわ、色が白いわ、内股だわで、なんとも頼りなさそうな中島君に、僕は水を差し出しつつ聞いた。

「そうなんです。あ、ありがとうございます。頂きます。んっんっんっんっ．．．。」

あまりの緊張に（ま）が抜けてんじゃん。しかも両手でコップ持ってるし。僕は中島君が水を飲みほすのを、こう思いながら待った。ルリ子ちゃんは？あ、ブツダ読んでる。中島君を見る。んっんっ．．．。まだ飲んでる。

チクタクチクタクチクタク．．．。

チリーンチリーン……。

あ、オバチャン。なあんだ、買い物行ってたのかあ。そうかそうか、買い物かあ。あ！今日火曜日だから駅前のアノ店！絶対そうだよ！あはっ！絶対アノ店の帰りだ！だって袋にやたら……。

「ぶはあ！ごちそうさまです。ふう。」

コトツとテーブルにコップを置きつつ中島君。

「ははは。こんな丁寧な飲み方する人もそういないね。」

「え？」

「あ、いいのいいの。ま、座って座って。」

ルリ子ちゃんの隣に中島君が座り、僕は二人の正面に座った。

「ヒロちゃん、わざわざ村から来てくれたんだ。でも、私、村の人達に迷惑がかからないようにってココに来たの。コチラが森田六郎さん……。それで、その、特にヒロちゃん。ヒロちゃんには大変な思いをさせてしまつて……。きっと大好物のカレーも食べる気しなかつたでしょう？」

ブツダにシオリを挟み、テーブルの上にそつと置いた後、ルリ子ちゃんは中島君の方を向き、彼の膝に手をあてこう言った。しかし慌てて中島君、

「いやいや！いいんだよ！いいんだよ！あんなのねえ、あの〜その〜、そうそうパツク！泥パツクと思えばさ、ホラなんかこう、浸かる前より肌が綺麗になつたんじゃない？とかさ、なるし。それにあ！カレー？ははは。カレーライスの事？いつもの通り四杯食つたよ。いやあ、うまいよね！カレーはさ。一体誰が考えたんだらう？分かります？六郎さん？あ、違う違う！つうか何だっけ？あ、そうだ！僕はね、ルリちゃん！僕は男だ。だから……。」

「よくないわよ！もう私、これ以上他の人を傷つけたくないの！そんなの見たくないのよ！このままじゃヤツは暴走するわ。きつとこの手紙見て。もう私たちで解決出来る問題じゃないのよ。」

ルリ子ちゃんは例の手紙を中島君に渡した。

「いいかい？中島君。ルリ子さんはね、中島君の事はもちろん、

山田村全員の事を考えて僕のトコロに相談に来てくれたんだ。その手紙の内容すごいだろう？僕はまだ詳しくゴツツイ石松の事は知らないけどさ、君なら分かるよね。その恐ろしさだ。」

プルプルと小刻みに震えながら、渡された手紙を読んでる中島君に、僕は言った。

読み終えたらしく、中島君は手紙を折りたたみ、テーブルに置いた。そしてこう言った。

「確かにこの手紙はグツとくるね。ブンブンだよ、危険な香りだね。でも僕は、あの事件以来変わったんだ。今までの僕も間違ってたかったけど、更にそこに、パワーが加わった気がするんだ。進化した僕は、結果というよりも進行形という……。」

「ま、今日のところはコレぐらいにしないと、うちに帰んなよ。僕は僕でベストな方法を考えるから。大丈夫。誰も失わないさ。あさってだね？朝一番で山田村に行くからね。」

僕は、長くなりそうな中島君の意見を遮り、こう締めたんだな。「それじゃあ、よろしくお願いします。六郎さん。サンマ美味しかったです。では、あさつての朝、港でお待ちしてますね。」

ルリ子ちゃんが立ち上がって言った。

「あ、お願いします。ありがとうございました。水。」
つって中島君も立った。

僕は二人を通りまで見送った。

そして、事務所に戻ってきた。

チクタクチクタク……。

無言のまま、両コブシを握り締め、そのまま上に持ち上げる。口ツキのポーズね。

いいわ。

いいぜ。今んとこいいぜ。メモもテキストに取ったし、手紙もあるし、山田村マップも書いてもらったし、さあて、後は作戦会議だね。いやあ、いいわ。いいじゃん。いけるいける。僕できるって！一人でもできるって！ははは！いいい！

なんつって、しばらく喜びの余韻に酔いしれた。その後、特に電話も無く来客も無かった。で、デビュー戦順調って事で冷蔵庫からワンカップを取り出し、鏡に向かって乾杯したんだ。で、三杯目かな？飲み干したトコでそのまま寝ちゃったんだな。

翌日、ルリ子ちゃんからの電話で目が覚めた。

「おはようございます。六郎さん。どうですか？作戦の方は？」

「あ、はは。うんうん、いいいいよ。なかなかいい感じに練れてるね。もうースパイイスが欲しいかな？なんてさ。ははは。」

ウツソ。嘘ついちった。だって昨日浮かれポンチで飲み過ぎてそのままソファアでボタンだもの。でもそんな事言えるかい？プロだぜ？つくしかないっしょ。僕がこんな事考えてるとは知らず、ルリ子ちゃんは会話を続けた。

「昨日は大変だったんですよ。夜、ヤツが暴れたらしくて。暴走まではいかなかったみたいですけど、ホント、もう寸前ですね。こういう個人的な事だったら、警察でもオツケーなんでガツチリ捕まえてもらいたいですけど、ウチの村のお巡りさんって、みんな年寄りばっかなんですよ。ま、コチラはこんな感じですよ。とにかく明日の朝お待ちしてますね。」

「了解。明日まではヘタに手は出してこないと思うけど、十分気を付けてよ。じゃ、僕は作戦の続きをやるとするよ。明日よろしくね。うん。じゃあね。」

ガチャ……。受話器を置いた。

そうだ。作戦練らないと。僕は、シャワーなんていいやってんで、サラッと顔を洗い、ボサボサの頭をセットし直し、ネクタイをキュツとやり、ミルクコーヒーを飲んだ。そして、歯を磨きながら、象さんのジョーロを持って、花壇に水をやりに行った。

「コレ、何て花だろう？全体的にミドリ。葉っぱが二枚。はは。雑草と変わらないじゃん。でもこんな地味なヤツでも成長すると色鮮やかな花を咲かせるんだよな。すごいすごい。」

外の空気をたくさん吸い込み、事務所に戻り、口をすすぎ、再び

ミルクコーヒーをズズズ。目は完全に覚めた。さて、やりますか。僕は自分のデスクに座り、メモ帳、マップ、そして手紙を広げ、作業を開始したんだな。

いやあ、練ったねえ。考えたねえ。ルリ子ちゃんと石松。果たしてどちらをベースに張り込むか？ルリ子ちゃんの家から石松の家までの距離、時間。調べたさ。石松に仲間がいるのか？いた場合はこう！いない場合はこう！二パターン準備。昼飯は何時にとるか？ルリ子ちゃんにケータイを持たせ、常に僕と連絡が取れるようにする。その際、僕は要所要所でルリ子ちゃんの緊張をほぐす意味で、面白い事を言わなくちゃいけない。その内容は？日没までは、二人を交互に監視するが、日没後はルリ子ちゃん重視にする・・・などだね。完璧だよ。コレ。奇跡的に今日も電話、来客も無しときて、スイスイスラスラ進んじやった。よし！本番は明日。頑張ろうぜ、六郎！お前ならやれる！ゴー！六郎！つって体力温存の為、僕は事務所を後にし、自宅でぐっすりと寝たんだな。

7

殺人予告日当日。朝。

僕は、船で山田村のある鈴木島へ。

「あああ。」

口からすべり落ちるように言葉が漏れた。甲板で、海の風に吹かれ、アゴの肉をほぐされてる犬のような顔をしていると、自然に漏れたんだな。だつてさ、気持ちいいんだもん。天気もいいし、鳥も泳いでるし。え？鳥が何で泳いでるかって？はは。比喩だよ、ヒュ。翼をバサバサやらず、大きく広げて飛行してる鳥は、飛んでるつうより空を泳いでる風に見えるんだな。

「あああ。」

あ、また漏れちゃった。ま、しいて言えばちよつと寒いんだけどね。あ、何か見えてきた。あれか！鈴木島。へえ、けっこうデカイ

んだ。ぼやけて見えていた島も、船が近づくにつれ、だんだんハッキリとしてきた。

「この船は、間もなく鈴木島に到着します。お荷物のお忘れございませんようお願いします。本日はご利用ありがとうございました。」

「しゃがれたオッサンのアナウンス。出発の時もそうだったけど、船長か？この声。ハウリンウルフじゃん。そして、オッサンの言う通り、間もなく鈴木島に着いた。よっこらせて、僕は船から陸地に足をおろした。わあ、何かいいじゃん。このノストラジックな雰囲気。のどかで、やさしい感じ。停泊する船、木造の待合室、ちょっとした店、とりあえず一台しか確認できない車、ニコニコしてる地元の人。これらを見ながら僕はこう思った。

あ、でも今夜は・・・！

「つて、僕は気分を無理矢理入れ替え、キリツとした表情で、そのままズンズン歩いていった。すると、やあ、いたいた！ルリ子ちゃん・・・と、もう一人。アレ？中島君？おいおい、いいのかい？二人一緒にいて。」

「六郎さ〜ん！」

ルリ子ちゃんが駆け寄ってきた。後から中島君も。

「おはようございます。六郎さん。船はどうでした？」

ルリ子ちゃんは息を弾ませながら言った。

「おはよう。いやあ、最高だったよ。いいもんだね、船は。それより、中島君大丈夫なの？もし石松に見つかったらマズインじゃ。」

「ははは。ヤッパリ正義は勝ちますね。六郎さん。」

中島君は前髪をかき上げつつこう言った。

「え？何？」

頭の上に？マークがペコーンって立った僕に、ルリ子ちゃんが説明してくれた。

「六郎さん！ヤツは逮捕されました！昨日の深夜、スナックでまた暴れたらしいんですけど、通りかかったお巡りさんに取り押さえ

られたんです。で、そのお巡りさんっていうのが昨日この村に赴任してきたばかりの人で、見た目は熱血警官って感じの人なんですけど、あはっ、ヤツパリ中身も熱血でした。しかも一人でヤツを押さえ込んだっていうし。すごいですよ。それで、これからですよ！その熱血お巡りさんが押さえ込んだ拍子にヤツのポケットから、なんと違法薬物の入った袋が落ちたんです。もうソッコウ逮捕ですよ。で、いろいろ調べたところ、ヤツはボクシングの試合前にもその違法薬物を使ってたみたいなんです。とにかく、この一連の事を知ったヤツの親はカンカンに怒って、ヤツとは親子の縁を切ったそうです。さらに、この村はおるか、鈴木島に一步でも入る事を禁止したそうなんですよ。つまり、永久島外追放って事です。今朝、ヤツのご両親がウチに来て、謝罪と共にこの事をすべて説明してくれました。

「そうかあ、そうなんだあ。ははは。よかつたね！これでみんな平和に暮らせるって事じゃん！ハッピーエンドって事だよ！よかつたね！よかつたよかつた！」

こうして三人は喜んだ。いいじゃんいいじゃん。で、その後、僕はルリ子ちゃんと中島君に案内されて、山田村を観光した。ルリ子ちゃんの家、中島君の実家の八百屋。二人がよく遊んだ神社、石松が最後に暴れたスナック、今では村のヒーローとなつた熱血警官のいる交番。あ、いるいる。なるほど、熱血を絵に描いたようなお巡りさんだ。それから中島君が落とされた村一番のコエダメ。デ、デカイ。ココでは中島君が興奮気味に事件をリアルに再現してくれた。途中で演技に熱が入り過ぎ、再びコエダメに落ちそうになり、僕らを驚かせた。そして、山田村を満喫した後、二人に見送られ、ハウリンウルフの船に乗り込み村を後にした。

あれから一週間。

僕は成長した。一皮むけたって感じかな。電話や客にビビる事も無く、受けた仕事を上手くこなす事が出来るようになった。ま、小さい仕事だけだね。考えてみると、あの山田村の一件は、仕事とい

う仕事じゃなかったけど、僕を進歩させる素材には十分だったんじゃないかって思うんだな。ホント、感謝感謝だよ。

「ジリリリーン！ガチャ！」

「ハイ！こちら櫻井探偵事務所です！ええ、はい、ええ、ええ。分かりました。はい、そうですね、ええ、では十一時頃に。はい、お待ちしております。それでは失礼します。」

ガチャン。

ズズズ。ミルクコーヒー。ふう。あ、そうだ。お花に水。僕は立ち上がり、象さんのジョーロを持って表に出た。ポストに郵便物があるのに気付く。やあ、ルリ子ちゃんからだよ！僕は水をやり終え、手紙を持って事務所に戻り、自分のデスクで読んだ。え？結婚？たはっ！中島君とかあ！うん、いい夫婦になりそうだ。ははは。アレ？って事は、中島君が、何代目だっけ？山田村の村長かあ。へええ。」

パサツて、何か落ちた。

写真。ルリ子ちゃんと中島君が幸せそうに二人で並んでる写真。

僕は思わずニヤついた。

よかったなあ。ハッピーエンドで。あ、そうだ。確か……。つつて僕は、デスクの引き出しをガラツと開け、ガサガサやった。あったあつた！前にどっかの店で衝動買いつた、銀で出来たシンプルなデザインの写真立て。コレに入れて飾ろう！僕はさっそく写真をセツトし、デスクに置いた。フフン。僕の記念すべきデビュー戦の思い出。ああ、それにしてもルリ子ちゃん、カワイイなあ。

その時、ドアがガチャツと開いた。

そして、なつかしい声が事務所に響く。

「おはよう。ロク。」

「おはようございます！先生！」
つつて僕。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0027g/>

若草物語

2011年1月26日15時48分発行